



中氏が撮影したアフガニスタンの写真は、
会場の人々に何を訴えたか

記念シンポジウム

新世代に引き継ぐ 奉仕の理想

ロータリーの精神を次代に受け継ぐ新世代合同会議のメンバーたちが、ズラリと壇上に登場。奉仕の理想について、それぞれの熱い思いを語った後は、彼らが見守るなか「新世代に引き継ぐ奉仕の理想」をテーマに、記念シンポジウムが開かれた。

●コーディネーター●

もず 昌平

作詞家。「釜が崎人情」「花街の母」などのヒット曲を作詞。「心身障害者に熱気球で大阪城を見せる会」を主催。

●パネリスト●

高畑 敬一

元松下電器労組委員長。厚生担当役員を歴任。NPO 法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ会長。

山口 良治

伏見工業高校ラグビー部総監督。京都市スポーツ政策顧問。

中 淳志

写真家。タリバンによる破壊後、初めてパーミヤン遺跡を撮影。



パネリストの話を熱心に聞く
新世代合同会議のメンバーたち

●生活上的コストとして「奉仕」は当然のこと

まず このシンポジウムは「新世代に引き継ぐ奉仕の理想」がテーマですが、ここでは奉仕の理想については議論しません。パネリストの方々は、それぞれ非常に完成度の高いお仕事をなさっておられますので、お仕事を紹介いただくことが、実は奉仕を考えることになるのではないかと考えています。3人の方々と事前にお会いして、大阪弁で言う「へえ、びっくりしたなあ」ということがずいぶんありました。

高畑さんは、「時間の預託」をテーマに、奉仕活動を貯金されています。私はその貯金は、いずれ自分に返ってくるためかと思ったのですが、「そうではないよ」と。一方的に奉仕をする。時間を預け放しで生涯を全うすることが喜びである。高齢者の尊厳とはそういうことなのです、と教えていただきました。

山口良治先生とは、「ラグビーとはどういうものですか」とやりとりしました。ラグビーは1人ではできない。自分がチームの貢献者になれた時は、誰かがサポートしてくれている。ありがたいの気持ちがないとラグビーはスポーツとして完成しない、と教えていただきました。初めて高校のラグビー部監督に就任されたときに名門・花園高校と対戦し、何と112対0で負けた。そのチームを、音に聞こえるラグビーチームに育てられたのが山口さんです。

中さんは、若い世代を代表する写真家ですが、非常に印象に残ったお話をうかがいました。アジアの諸国にレンズを向けて写真を撮ってこられました。貧しいことと経済的な豊かさとは比較対照できないところがありますよと。アジ

アでは子どもの自殺者はほとんどありません。日本では、どれほど多くの子どもが毎年自殺をしているのでしょうか。ショックを受けました。

3人とも、とても大事な奉仕活動を、日々の仕事でなさっているのでは、と思いました。私は、奉仕とは社会生活をする上で、万人に等しくかかる生活上のコストとして当然のことだと思います。教育費がかかるように、奉仕にも当然のコストをかける。そんな考え方に至れば、理想に近づけるのではないかと考えております。

●ボランティアをすることで生き甲斐をいただく

高畑 日本の厚生年金はずい分良くなりました。子供の世話にならないで、自立して暮らして行けるようになったのです。問題は定年後約20年間、どのように精神的な自立、充足感を持って生きて行くかということです。そういうことを真剣に考えていらっしゃる皆さん方と、地域で新しい出会いを創りながらボランティアをやらせていただいて、自分の生き甲斐をいただくという趣旨でシニアのボランティアNPOを作っています。

日本のボランティア団体は約10万ありますが、ほとんどが「ときどきおやりになる」単発型の活動団体です。しかし、自分に生き甲斐と健康を頂戴しようとする、週2〜3日はボランティアをしたい。そこで定期継続型のボランティア団体にしまして、小さいながらも事務所を置き、コーディネーターを置いて活動しております。

ボランティアをした時間を1時間1点として貯めて、自分が困ったときにはそれを出して使う、また遠く離れて暮らしている親のためにも



まず 昌平氏

それを使って行ける、こうしたシステムをメインにしているわけです。これは人生の記録、人様に尽くした記録であり、できれば使わないでピンピン生きてコロリと死にたい。

阪神大震災の前にスタートしましたので、当時は介護保険がありませんでした。今は介護保険で足りないところ、介護保険の適用を受けないお年寄り、1人暮らしだけど放っておくと介護が必要な状態に陥るかもしれないというお年寄りの家庭に行き、ボランティアのサービス活動しております。最近は少子化対策を含めて子育て支援、あるいは町をきれいにする環境美化にも力を入れています。

まず 高畑さんはNPO法人日本アクティブクラブ会長のお立場ですが、会員の構成などを紹介いただけませんか。

●スポーツを通じて心、精神を育てるのが大事

高畑 世界でも珍しいと思うのですが、50歳以上が会員資格で、大半は定年退職者です。夫婦での入会を原則としていまして、現在会員が1万6,000人、70%が夫婦で入会して活動しています。1番多いのは60代、次が50代、次は70代、80代、40代の順番です。最小行政単位ごとに支部を作ってそこで活動するわけですが、現在83の拠点があります。

まず 山口良治先生にお会いしたときに「ラグビーのボールは、なんで後ろに渡しまんねん」ということをお聞きして、いや困ったなあという顔をされました。なぜ、そんな質問をしたかと言うと、現代社会は早いことはいいことだと、利便性の追求が肯定されているからです。本来ならゴールに早く届くためには前に放つたらいのに、不思議なスポーツだと思って。

ラグビーは1人ではできないということ、非常に興味を持ってお話をうかがいました。1

人でできない、ならば……というところをご紹介いただければ有り難いです。

山口 私は長年、学校の教師をしておりまして、教育者として今日まで頑張らせていただきました。ロータリーの皆さんには、未来を担う青少年の健全育成に、大変大きなご尽力をいただいておりますことをこの場をお借りして、心から敬意と感謝を申し上げたいと思います。

たかがスポーツ、たかがラグビー、どのスポーツにも言えますが、体の大きな、力のある、足の速い、技術のうまい選手を集めて強くするのは、ある意味では近道かもしれません。でも、私が最も大事にしてきたのは、そのスポーツを通しての心、精神の育成です。

ラグビーは当初、ラグビーフットボールといいました。ボールを蹴って、陣地の取り合いを原野でやっていたのが、どんどん進化して、現代ラグビーがあるわけです。ラグビーがルールの中で最も大事にしているのは、イコール・コンディション、同じ条件ということです。今は15人で常に交代できますが、1人ケガしたら14人になっても、敢闘精神が求められた時代がありました。激しい格闘技です。

●自己責任を果たし、感動を発信できる人間に

ラグビーにはオール・フォー・ワン、ワン・フォー・オールという言葉があります。15分の1の責任を果たす。今、日本の社会ではこの当たり前の自己責任が問われない、果たせない子どもや大人が非常に多いと感じます。

私はまず、目に見えない気持ちを大事にしました。1個のボールを両チームの30人が扱って試合をやるラグビーでは、1人がボールを持つ時間は1分もない。50数分間かはボールを持たないでラグビーをやる。チームのためにサポートするプレイがほとんどなのです。そうい

った意味で、ラグビーそのものが人間教育だと思っていますし、1人でも多くの子どもたちにその場を経験させてやりたいと思っています。

今はうんと少なくなりましたが、多いときは1人で127人も部員、全校生徒の1割以上、3クラス分以上の子どもたちの面倒を見てきました。山口指導所と言われたほどで、3人分の給料が欲しい、と思ったりもしましたが(笑)。今は90人。それでも全校生徒の1割以上です。

子どもたちにいつも言ってきたのは、「ありがとう！」と言ってもらえる人間になろう。そして「ありがとう！」って言われたら「いえ、どういたしまして」と言おう。1人でも多くの人に喜んでもらえる存在になろう。ずっとこのことを言い続けてきました。ラグビーというスポーツに出会って心身を鍛えた子どもたちは、皆から見放されたり、疎外されたりしていたのに、今では多くの人に感動を発信できる若者に成長している。若者の可能性って本当に素晴らしい。そのことを強く感じます。



山口 良治氏

●ラグビーのポリシーが薄れてきたことを危惧

もず ラグビーもプロ化が進んで、例えば身体能力の優れた、体のかい、走りの速い選手を集めてチームを編成することがあると聞いています。そのチームが強いのか、必ずしもそうではなさそうだ・・・そのあたりはいかがでしょうか。

山口 体の大きい足の速い強い選手を集めてやれば、1番近道だとは思いますが、強さは決してそれだけではない。ラグビーはアマチュアスポーツの最後の砦だったのですが、今やプロ化が進んで、お金のためにフルタイムで選手をやっている人が多くなりました。日本には、もう

外国から200名近い選手が社会人や大学のチームに来ています。高校のチームにもニュージーランドやトンガから留学生として、勝たんがために来えています。花園大会などにいきますと、「おい、あいつは本当に高校生か。25か30歳くらいの顔をしてるぞ」(笑)と。

フォア・ザ・チームとか仲間のためにか、ラグビーの教育的なポリシーがだんだんと薄れていることを危惧しています。日本だけでなく世界中で、プロ化の悪影響を多くの人が憂いておられる気がします。

もず 身体能力の優れた人間ばかりが集まれば、いいチームができるわけではないことが分かりました。私は阪神ファンですが、山口先生のお話から今年は阪神の優勝は絶対にあるな、

と思っております(笑)。

それでは、中さんにお話をうかがいます。私も歌の関係で随分アジアに出かけて行くのですが、現地で取材することはとても難しい。それについて、中さんから素晴らしいヒントを与えていただきました。

とりあえず「現地の家族の客人になることが大事でっせ」と。中さんはアフガニスタンのある村では、ジャパニココ、日本の叔父さんと扱われておられる。それがいい写真が撮れる秘密であったり、取材ができる秘密であったりする。写真家ですから、ここに写真を登場させて、こんな写真を撮ってきたというところからお話をいただきたいと思います。

●日本は文化財を持ち込める“無法地帯”

中 これはアフガニスタンのバーミヤン遺跡にある大仏です。東西2つの大仏がありまして、こちらは西の大仏です。高さ55メートル。東大

数千人単位の虐殺を受けています。

このキャンプには全く飲料水がありません。毎日、片道2キロの道をミネラルウォーターのペットボトルを持って水汲みに往復しないといけない。ソ連の侵攻以後、23年間国際的に全く放置された場所で、ずっと内戦が続いていました。1,200万発と言われる対人地雷が全然処理できていない。

●アジアの仲間同士「知り合う」ことが必要

先ほどの写真の子どもはポリオに罹っているのですが、病院や学校が壊滅的な打撃を受けたので、非常に苦勞されています。ようやく昨年、一時的な平和が訪れましたが、いつまで持つか



中 淳志氏

分かりません。アメリカ軍が撤退する話もあり、最低限生活に必要な食糧、医薬品、学校施設の充実が緊急の課題になっています。もず 少年少女たちはどういう立場に置かれているのか、皮膚感覚的に感じられたことを紹介

いただければと思います。

中 日本は確かにたくさんのアジアの国に経済援助をしています。例えば、ラオス、バングラディシュ。両方とも国連が指定している最貧国ですね。平均月収が20ドルとか10ドル、1,000円、1,500円、多くても2,000円の収入しかない国々を実際に自分の目で見て歩いてきました。日本は情報大国だと言われてはいますが、驚いたことに、これらの国に関してガイドブックもなければ何の情報も入っていない。どこにホテルがあるのか、どんな観光地があるのか何も分からない。そういう場所がアジアの中にもたくさんあるんです。

政府の最大収入が日本からの援助なんだという。現地の人からは「お前は日本人なのか。た

寺の大仏様が約15メートルですので、その大きさを実感していただけたと思います。2年前、イスラム原理主義のタリバンが大仏を爆破してしまいました。現地では話を聞くと、実際に大仏を爆破したのは外国から入ってきたアラブの人たちだと。非常に大きなショックを受けました。

次の写真は壁画です。バーミヤンには750の石窟、石の崖を掘り抜いた部屋があり、京都大学が1番から順に番号を打ったのですが、その330番目が残されていました。一時は全滅が危惧されていました。この石窟には14メートルの竹のはしごを使って中に入りました。このように1部切り取られています。

切り取られた壁画の1部分が、日本に流入しています。何でもお金で買い集めてコレクションしようとするところがあります。日本では、文化財の流出については非常に多くの法律があって持ち出せないようになっていますが、持ち込むのは“無法地帯”。最近では、イラク・バクダッドの博物館が襲撃されて随分持ち出されましたが、かなりのコレクションが恐らく、数年以内に日本に入ってくるのではないかと思います。現在、マーケットで売っているものはほとんどが盗品、または盗掘品で、非常に問題になっています。

次の写真は、避難民のキャンプで撮影したものです。国内で戦乱を逃れて移動した人たちを「避難民」と呼びます。国外へ出ると「難民」となります。後方に白いテントが写っていますが、バーミヤンの石窟の中に、かなりの数の住民が生活しています。地元のハザーラ族の人たちは略奪、強姦、破壊などの大弾圧を受けました。バーミヤンの遺跡は自分たちのご先祖様が作ったものだからということで、破壊に抵抗したのです。それで邪教の神を信仰すると言われ、

くさん援助をくれてありがとう」と言われるのですが、逆にこちらは何も知らない、何も分からない。日本には、そうした国の情報が何も無いことが非常に驚きでした。

アジアは、距離的に非常に遠いところまでを含みますが、かつて同じ文化を受容してきた1つのファミリーだと思っています。ただし、アジアのあちこちの国で内戦やテロなどが起こり、問題が非常にたくさんある。まず、お互いを「知り合う」ことが、最低限必要だと思うのです。私の仕事はまず知ってもらうこと。それも単に外国としてみるのではなく、自分たちの日本が、アジアの中の国であることを見直してもらいたいと思っています。

もず 私もアジアの某途上国に音楽の交流のために行きましたが、過激派のテロが発生して事務所が吹っ飛んだ体験があります。地雷のやっかいなところは大した殺傷能力がない点。ケガをさせ、兵力としては使い物にならない人間にして、生存だけは奪い取らない。その方が費用がかかるからだと。人間にこんな発想ができるのかと驚きますが、子どもたちが対人地雷の被害者になっている。戦争によって最悪を被るのは、当事者である大人たちより子どもたちであることに、われわれは心しないといけない。

今日のテーマである新世代にどう引き継ぐか、そのノウハウをわれわれは持っているのかと私自身、自分に疑問を感じています。やはり今、中さんの発言にありました「知り合う」というのがとても大事です。

●人様のために多くの時間を使って良い人生

皆さんは、自分のお仕事を中心に奉仕活動の

一端を担ってらっしゃる。大阪弁で言う「もうかる仕事」を1人もなさっていない。さて、どうしてこの仕事に取り組むようになったのかを聞いて行きたいと思います。

高畑 私が松下電器に入社した頃は、昭和20年代の後半でしたらから、定年が55歳、そのときの平均寿命が62～63歳。先輩たちは定年になったら5～6年で死んでしまわれた。70まで生きている人は、長寿だと言われた時代でした。

私が定年を迎えた頃は、平均寿命が80歳くらいになったのに、定年はたった5年しか延びていませんでした。本当は定年も延びないといけないのですが。60歳から20年間となると、これは余生ではなくて第2の人生だ。何を生き



高畑 敬一氏

甲斐にするか考え抜いた末、人様のためにできるだけ多くの時間を使うことが、いい人生ではないかと思うようになりました。では、何をどんなふうに行うかと周囲を見回したら、同じように考えている人がたくさんいることが分かりました。

現役時代、アメリカへ行った時に、アメリカの大人の約半分がボランティアをしているのを知りました。特に高齢になるほどボランティアの時間が長くなる。平均すると週5～6時間は継続的にボランティアをしている。アメリカでは公的な健康保険がなく、民間の保険会社に高い保険金を払って医療保険としている。介護保険もなく、日本と比べれば社会保障が良くない。ただ、アメリカは助け合って新しい社会を作ってきた建国の事情で、行政の不足を自分たちの協同の力でやるところがある。これは素晴らしいことだな、と思いました。ヨーロッパと違うところですよ。

日本は今までは非常に良かった。世界一の経

済国だったのですから。しかし、行政が何でもやってくれる時代は過ぎました。一方で年寄りが人口に占める割合が去年ついに世界1になった。これから世界記録を更新しながら、3分の1が高齢者の、世界が経験したことのない「年寄りの多い国」になるわけです。

生きる希望もなく公園のベンチに座っている年寄りばかりになったら日本に未来はない。自分の問題でもあるけれど、日本の問題でもあるわけです。

アメリカには、全米退職家協会というのがあります。50歳以上の大人の半分が入っています。町ごとに4,000の支部があり、そこで皆さんがボランティアをしながら助け合って自分も元気にさせてもらっている。これを見習って、全国規模で人生を前向きにいきいきと生きていきましょうと「日本アクティブライフクラブ」と名付けた組織を作りました。

●大人は子どもに感謝の心を教え目標となろう

もず 「いきがい」をテーマにした展開なのですね。それでは山口先生、先ほどのお話に関連して、具体的に自己責任を根付かせるために何が必要か、お聞かせいただけませんか。山口 日本の国は豊かさにあふれ、満たされていることに何も感じなくなってしまう。この心の貧しさが一番大きな社会の、そして教育の問題だと思っています。私は恩師の姿を手本に今日までまいりました。皆さん、いかがですか。小学校低学年の頃の先生を覚えていますか。(後ろの若者に向かって) 皆、覚えてる？ 私は7歳で母が死にましたので、先生方にぜひ分助けていただきました。

では今、果たしてどれだけの教師が、子どもたちに「先生になりたい」という夢を与えているのでしょうか。世の大人たちが「あんなお

じさんになりたいな」「あんなおばさんになりたいな」という夢を伝えているのでしょうか。子どもの目標としての存在たり得る大人がどれだけいるのでしょうか。貧しい、悲しい出来事がいっぱい起こっています。果たして本当にこのままでいいのでしょうか。

中学生はたかが12歳から15歳の子どものです。確かに教師を殴ったり、暴れて人に迷惑をかける子もいる…でも、初めからそうだった子はいません。どんな関わりを持ってやれるかが大事。見て見ないふりをする無責任な大人では困ります。まず親のお陰、おじいちゃんおばあちゃんのお陰という感謝の心をきちんと伝えることです。

人間は1人では何もできない。1人では生きていけない。それをなぜ伝えられないのか。ラグビーは1番人数の多いスポーツですが、人の力がどんどん自分に生かされ、自分が人を生かす。そこに喜びがある。

どの子どもも家庭環境が違い、いろんな状況があります。だからといって人生を差し引いてもらえるわけでもなく、代わってやれるわけでもない。そんな子どもたちに、一言きちんと伝えれば、素晴らしい頑張りをしてくれます。子どもたちの素晴らしい可能性を信じてやりたい。そして大人は、子どもの目標たり得る、夢を語ってやれる人であってください。どれだけ子どもたちが喜ぶでしょう。

もず 啓示に富んだお話がたくさんありました。まずは大人が自信を取り戻さないといけない。誇りを持って次の世代に何かを伝えていくことが大事だと思いました。

●1番大切な相互理解がないから紛争が起こる

日本はアジアの中で共存共栄して行かなければならないと言われています。歴史認識が問わ

れ続けています。中さん、日本とアジア諸国との心の交流で、われわれが考えなければならぬ点をご披露いただけませんか。

中 最初は、お金が儲かる花や山の写真を撮ろうと思ったのですが、結局1番お金の儲からないドキュメンツの写真を選んでしまいました。

1番大切なのは相互理解ですね。いろいろなところで紛争が起こっていますが、お互いがお互いのことを知らないから、起きているのがほとんどです。後は利権の問題です。それで犠牲になるのは1番弱いところ、一般市民とか子どもたちです。

例えばアフガニスタンの対人地雷。だいたい毎週のように事故がある。私がバーミヤンに3週間いた間に3回事故がありました。子どもが2人亡くなり、1人が指を2本なくしました。もう1つの事故では大人の男性が片腕と両目をなくされた。一応、町中に「こういう爆弾や地雷がある。触ってはいけない」というポスターは貼ってあり、学校でも見本を見せて教えています。

しかし、現時点では学校に行っている子どもは半分。残りの半分は全く字が分からない。生活物資がないので、役に立つかと何でも拾って帰る。燃料もなく、たきぎを拾うのも子どもの仕事。おもちゃもないので、拾って帰って触る。そういう事故が多いそうです。

学校に行っていない子どもにどうやって地雷の危険性を伝えればいいのか。僕はただの個人です。1人でできることは本当に限られている。悔しくて涙を流すことがよくあります。何もしてやれないと。だけど僕は写真家です。数多くの人々に写真を見てもらって、こういう現実があることを知ってもらう。ただ僕は、どうしてくれとは言わないことにしていますが。

アジアの人たちは、かつて同じ文化を持っていたファミリーです。そう理解すれば、ファミ

リーが病気になったら、心配して薬を持ってお見舞いに行くのはごく自然のこと。いいことをしているという意識もなく助けに行きますよね。アジアの仲間が、自分の家族同様に助け合ってきたらいいなと思います。

●他者に向かって心を配ることが本来の「心配」

もず 皆さんのお話には、共通するところがありました。中さんが「心配」という言葉を使われました。心配は心を配ると書きます。本当は他者に心を配ることが心配なのに、今のわれわれは自分に向かって心を配っている。3人の方は自分以外のだれかに心を配ることを、身をもって実践されている。

国民には憲法の規定によって3つの義務があります。教育、納税、勤労の義務です。このうち義務教育の義務を、国から子どもに付与されている権利と理解されているのではないのでしょうか。これは反対であって、社会人たり得るための注意義務を自分の義務で習わないといかんということなんですね。義務を課せられているのは少年少女や青年であって、等しく教育の機会を付与することとは違います。

山口先生の自己責任の話は、本来的には憲法も規定していることです。そうした「責任がある」ことを大人の責任で、子どもに伝えていくことが本来の意味での奉仕活動につながっていくのではないかと思います。先ほど、千玄室氏のお話の中に「足元を見直しませんか」という言葉があり、私もハッといたしました。もう1度奉仕活動の本質は何かを、若い世代と共に考え直してみたいと思っております。後ろの若い世代の皆さん、何か感じるころがあれば、おじさんたちに球を放ってください。ありがとうございました。